



「辺境」の力：上関・祝島の現場報告から(上映会 &シンポジウム ポスト原発時代を生きる：上関・ 祝島の現場から)

著者	リケット ロバート
雑誌名	東西南北
巻	2014
ページ	31-44
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00003556/

「辺境」の力 上関・祝島の現場報告から

ロバート・リケット 所員／現代人間学部教授

2013年1月12日に私たちは『ミツバチの羽音と地球の回転』の上映会とシンポジウムを開催しました。映画終了後、鎌仲ひとみ監督とともに、映画に登場した山戸孝さんと高島美登里さんが現場からの報告をしてくださり、パネルディスカッション、活気のある討論と、本イベントは7時間にも及ぶ充実したものになりました¹⁾。

シンポジウムは、和光大学の教職員学生有志の企画責任で、大学の総合文化研究所とのコラボレーションで実施したものです。和光大学有志が原発問題を問うイベントとしては3回目のもので²⁾、初めて原発「予定」地の住民の声を直接届く場を設けました。受け入れの軸になったのは、2012年9月上旬に上関町の原発予定地を訪ねて、一緒にフィールドワークを行なった学生たちでした。上関で私たちを迎えてくださった高島さんと山戸さんと学生たちとの出逢いが、今回のシンポジウムの出発点となったのです。

1——『ミツバチ』の背景に

鎌仲さんの『核を巡る三部作』の一作目は、1998年のイラク訪問から始まります。1991年の湾岸戦争で米軍がバラまいた劣化ウラン弾による、低線量放射線の内部被曝の犠牲になった子どもたちとの出逢いでした。

日本へ戻った鎌仲さんは、原子力発電による低線量の内部被曝に注目し、「子どもをヒバクさせないためにどうしたらいいかを突き詰める」ために、青森県六ヶ所村の再処理工場の問題を二作目のテーマに選びました。現地六ヶ所村で、鎌

1) ディスカッションと質疑応答も含めて、シンポジウム全体は古賀加奈子さんによって録画され、USTREAMで観られます。

2) 「緊急ティーチイン@和光大学」(全3回) 2011年5～6月、「小出裕章さん講演と対話@和光大学」2012年2月、「ポスト原発時代を生きる@和光大学——上関・祝島の現場から」2013年1月。

中さんは、大量の放射性物質を放出する核施設を建設するため、「原子力ムラ」³⁾が権力とお金を使って住民を巻き込み、反目させ、立ち向う人びとや組織を力づくで切り崩していくという厳しい現実を突きつけられます。

そして第三作で、「権力構造の正体」を暴き続けながら、「脱原発を実現した社会」⁴⁾の具体的なイメージを描き出そうとしました。それが、スウェーデンと祝島の例を取り上げた、本作『ミツパチ』です。

祝島とその出逢い

山口県の上関町祝島^{いらいしま}はハート型をした、人口 450 人の小さな島です。1982 年、この祝島から 3.5km 離れた対岸に、中国電力（中電）が原発予定地を選定しました。上関町は、元総理大臣の岸信介と佐藤栄作の選挙区内にあり、過疎からの脱却のため企業誘致を望んでいた小さな町でした。原発立地は「町の振興策」であり、生き残るための「最終選択」でした⁵⁾。予定地は長島の田ノ浦という、祝島の唯一の集落の真正面で、そこに原子力発電所 2 基を建てる計画⁶⁾でした。

しかし、建設案が明らかになると、祝島の島民は即時立ち上がり、その時から息の長い反対運動を積み重ねてきました。島へ U ターンした 40 代の山戸貞夫さん（孝さんの父）⁷⁾を中心に、1992 年には「上関原発を建てさせない祝島島民の会」（島民の会）が生まれました。島民の会は、反対、推進を問わず全島民に門戸を開き、「常に多数で協議を繰り返し、方向性をまとめ上げて決定するという寄り合い的な組織運営ができるようになった」⁸⁾と山戸さんは記します。

祝島のその決意はどこからくるのでしょうか。山戸さんによれば、広島原発

3) 原子力ムラは、原発メーカーと関連産業や原子力をめぐる産・官・学、利害関係を持った政治家とマスコミの癒着のみならず、原発を誘致する地方自治体と推進する立地住民をも含んだ広大な利益共同体を意味します。巨大な科学技術と莫大な原発マネーと、それをめぐるさまざまな利権関係を中心とした社会システムです。飯田哲也『「原子力ムラ」という虚構』、飯田哲也、佐藤栄久、河野太郎著『「原子力ムラ」を超えて——ポスト福島のエネギー政策』NHK ブックス、2011 年、pp.17-40、および開沼博『フクシマ論——原子力ムラはなぜ生まれたのか』青土社、2011 年参照。

4) 鎌仲ひとみ『原発、その先へ——ミツパチ革命が始まる』集英社、2012 年、p. 100。

5) 上関町の人口は、1960 年に 12,300 人でしたが、原発建設計画が持ち上がった 1982 年には 6,800 人と、ほぼ半減しました。巨額な原発助成金にも関わらず、2000 年にはさらに 4,300 人に激減し、2013 年現在は町民は 3,100 人しかいません。原発誘致については、朝日新聞山口支局編『国策の行方——上関原発計画の 20 年』南方新社、2001 年、pp.20、219-220、および山戸貞夫『祝島の闘い——上関原発反対運動史』岩波書店、2013 年、p.15。Martin Dusingberre, *Hard Times in the Hometown: A Modern History of Community Survival in Modern Japan*, University of Hawai'i Press, 2012, Chapter 10 参照。

6) いずれも 137 万 KW の改良型沸騰水型原子炉（ABWR）。

7) 山戸さんは 1970 年代に本土で暮らし、島根大学の農学部に通いながら、社会学も学びました。学生運動に参加し、成田空港反対運動にも関わり、松江市の零細企業で組合を立ち上げて労働運動に専念することになりました。祝島に帰ったのは 1985 年でした。その後、1982 年に発足したトップダウン型の「愛郷一心会」の刷新につとめました。インタビュー、郷土祝島資料館にて、2012 年 8 月 27 日。

8) 山戸、前掲、p. 37。

ヒバクした島民もいて、さらに1970年代後半から島民20数人が出稼ぎ先として原発建設や定期点検の作業に従事するなど、放射能の怖さは島内で広く認識されていたと言います。また、1980年代は祝島の経済状況がよく、「活気にあふれた時代」で、島は栄えていました。しかし、何より島民が恐れたのは、島の生き方と絆の崩壊でした。伝統祭り「神舞神事」⁹⁾を復活させるなど、抵抗行動とは別に、暮らしの活性化をめざして原発に頼らない島づくりに取り組んだのです。山戸さんは、「ただひたすら田舎の普通の漁師・百姓・おばちゃんとして、経済的には何の役得もないのを承知の上で手を取り合い、必死になって自分たちの島での命と生活を破壊しようとする『原発』に歯向かってきた」¹⁰⁾、と言います。

そのために、自力で抵抗運動を展開してきました。中電とぶつかると、お母さんたちは男たちとガードマンや作業員の間に入って敷地内に座り込んだり、自分の身を予定地の柵などに鎖で縛ったりもしました。手も足も出さない直接行動で、地道な抵抗を続けてきました¹¹⁾。一回の例外（脚注12参照）を除けば、反対運動は30年間逮捕者を出さなかったのです。

鎌仲さんは、その「イデオロギーではなくて、生活を守るための運動」に惹かれました。彼女が初めて祝島を訪ねたのは、2007年の『六ヶ所ラブソディー』の上映会の時でした。翌年の2008年から『ミツバチ』の撮影を開始し、2年間かけて島の諸相を撮り続けました。

一方、中電は、2008年田ノ浦の水面埋め立て許可を山口県に交付してもらい、



『祝島観光案内地図』
<http://www.iwaishima.jp/home/info/info.htm>

9) 伝承によると、886年に現・大分県国東町の伊美の人びとが祝島に漂着し、島人に救われたそうです。島の苦しい生活を見て、お礼として「お種返し」と言い、4年ごと（現在）に祝島に船で派遣団を送り、合同祭事を行なうという祭りです。iwaishima-kanmai.net/introduction.htmより。

10) 山戸、前掲、pp. 8、157。

11) 福島菊次郎、那須圭子『中電さん、さようなら——山口県祝島原発とたたかう島人（しまびと）の記録』（創史社、2007年）の写真集はその心情とたたかい方を記録しています。

2009年、2010年、そして3.11の直前まで、その準備作業を押し進めようとしてきました。しかし、そのたびごとに、祝島の漁船団は連日、田ノ浦まで通い、作業を中断させたのです。その時、島の人たちの苦闘に心を寄せた、若者を中心にした支援者が集まり、力を合わせて抵抗する場面も映画の中で印象深く撮られています¹²⁾。

中電は2011年2月、600人のガードマンを動員し、海上保安庁の巡視船の助力を得て、予定地に座り込んでいた祝島島民を追い払って砂利を海面に投入しようとしたが、この作業も中断されました。3月11日の3日後、二井関成・山口県知事が中電に対して埋め立て工事の中止を要請し、2012年10月に埋め立て許可の免許は失効となったのです。現時点で、復活の可能性は常にありますが、上関原発計画は当面、「中止」状態になっています。

地域型エネルギー自立をめざして

2010年の半ば頃から、祝島をテーマにした『ミツバチ』と『祝の島』(額^{ほおり}あや監督)という二本のドキュメンタリーが全国各地で上映され、3.11の約1年前に、祝島へ大きな関心が寄せられることになりました。

額^{ほおり}さんは、反原発運動を島民の日常生活や、複雑で親密な人間ネットワークのなかに位置づけます。鎌仲さんは、どちらかと言えば、映画の前半に収められたスウェーデンの経験とつなぎあわせるように、運動の先にある脱原発社会への取り組みに目を向け、小規模であれ、新しい、「日本版」の試みに注目します。鎌仲さんは、祝島の取り組みは「スウェーデンと比較するとタイムスリップしたのではないかと思えるほど、のどかなものでした」¹³⁾と言います。

鎌仲さんは『ミツバチ』の祝島編を、山戸孝さんを中心にまとめました。孝さんは島の中学校を出て、本土で高校と大学時代を過ごし、2000年23歳の時に故郷へもどって2005年に結婚し¹⁴⁾、2007年には町長選に立候補もしました。孝さんは、選挙をきっかけにUターンとIターンの若者の力を発揮させようと「未来航海プロジェクト——一流の離島・地球船祝島丸」¹⁵⁾という集いの場を作りました。

孝さんはビワ農家として生業を立てながら、ビワ茶を作ったり、ひじきを採ってゆでて干すという島の伝統的手法で加工したり、島のお母さんたちと干しダコなど島の特産品を作る農水産工房を経営しています。販売は「祝島市場」で、広

12) 2009年末に中電は島民2人と支援者2人に対して、「工事妨害」として4800万円の損害賠償を請求するという“スラップ”訴訟を起こし、今現在、継続中です。この3年間の攻防戦について、山戸貞夫『祝島日記——原発予定地を目前にみる島に生きて』原発いらん！下関の会、2013年を参照。

13) 鎌仲、前掲、p.122。

14) 結婚式が上げられたのは祝島ではなく、神舞神事と縁の深い大分県国東町の伊美別宮社でした(福島菊次郎、那須圭子、前掲、p.112)。結婚の披露宴は21年ぶりに祝島で行なわれました。

15) 現在、「一流の離島・祝島を島民自らの知恵と汗で作り出す」(山戸、前掲、p.148-149)。

島近辺などの常連客の他に、ネットを通じて行なわれています。

貞夫さんは、1994年、自宅に太陽光発電機を整備しましたが、その試みは島には広がりませんでした。その後、孝さんは、祝島で開催された『ミツバチ』のお披露目上映会（2010年4月）の時、山口県出身の飯田哲也さん（環境エネルギー政策研究所所長）に出逢い、脱原発社会へのエネルギーシフトの取り組みに真剣になりました。



祝島の太陽光発電所

飯田さんの調査を経て、「祝島自然エネルギー 100%構想」が講じられ、2011年1月にそれを支えるための「一般法人・祝島千年の島づくり基金」が発足しました。このプロジェクトは、自然エネルギー 100%をめざしながら、食糧の「自産自消」、特産品の発展などの「フード事業」、生活と介護をつなぐ「ライフ事業」、運動と連動する芸術・メディアによる「アイト事業」、そして環境保護を元にした「エコツーリズム事業」など、多岐にわたる包括的な取り組みです。島民の会は持続可能な島づくり構想に賛同し、基金の理事と監事数名を選出しました¹⁶⁾。地域分散型自立をめざす島ぐるみの試みで、離島では日本初です¹⁷⁾。

上関の自然を世界遺産に

高島さんは、上関原発の問題に1980年代後半から関わり、1999年に「長島の自然を守る会」（現・上関の自然を守る会、以下、守る会）を発足させ、現在はその代表です。2010年に上関町の室津^{むろつ}へ移り住みました。

守る会は、中電の通産省（当時）への「環境影響評価準備書」のずさんさに異議を唱えるために結成されました。日本生態学会、日本鳥学会、日本ベントス（底生生物）学会に働きかけ、その専門家と共同調査を実施することで、稀少生物のスナメリ、ハヤブサ、ナメクジウオなどが見逃されたことを立証しました。その調査結果を認めた通産省は、2000年、中電に追加調査を命じたのですが、その後も中電の環境アセスメントの不備が何度も指摘され、再調査が指示されてきました。3学会は2010年に合同声明で中電に対して原発建設の一時中止を勧告し、「適性な調査の実施」を要求しています¹⁸⁾。

上関町は西瀬戸内の原風景を残した数少ないところです。絶滅危惧種や稀少生物を含む生物的多様性に富み、地元で「命の海」「宝の海」と呼ばれる生態系の

16) 山戸、前掲、pp. 152-153。

17) 鎌仲、前掲、pp. 139-141。

18) 日本生態学会上関要望書アフターケア委員会（編）『奇跡の海——瀬戸内海・上関の生物多様性』南方新社、2010、pp. 232-233。守る会の活動については、高島美登里「いのちの海を埋め立てないで」『だめ！ 上関原発』原水爆禁止山口県民会議、2012年、pp. 12-14を参照。

恵みを大切にするため、守る会は調査船「きぼう」で、季節ごとに海上調査を実施し、国際シンポジウムも含めて国内外に、原発建設をやめて上関町の生き物を保全する緊急性を訴えています。

2012 年、長島の自然を守る会（当時）は国際自然保護連合（IUCN）に加盟しました。この時、IUCN は守る会の活動を次のように評価しました。「上関原発予定地周辺の自然環境の豊かさを研究者や地元漁師の方々と協力しながら調査し、実績をあげてきた団体です」¹⁹⁾。守る会は、精力的に上関周辺の海域世界の知名度を高めながら、ユネスコの世界遺産への登録を求めています。原発立地の是非をめぐって分断させられた町にとって、科学的普遍性と世界遺産という未来像は二項対立を越えられる貴重な立ち位置で、大きなアピール力を持っているのです。さらに守る会は、保全活動を通して、すでにローカルな抵抗運動を、県、全国、世界レベルで活躍している支援グループとつなぎ合わせる要にもなっています。

2 —— シンポジウム以降 —— 新しい局面に向かう反対運動

2013 年 1 月のシンポジウムの前後から、建設に反対する住民は新しい困難に直面しています。それは、2012 年末の自民党政権の成立の直前に期限切れとなった田ノ浦湾の埋め立て許可の延長申請の問題と、原発交付金の受け取りを拒否してきた祝島漁協への県漁協本店の介入です。この問題は、原発神話の崩壊と原子力発電への不信に対する原子力ムラの多面的巻き返しという大きな動きを反映するものと見るができます。

2012 年 10 月に水面埋め立て免許が期限切れになったとき、中電はすぐ延長申請を提出しました。それに対して、7 月末の県知事選で就任した山本繁太郎県知事（元国土交通省官僚、自公推薦）は、現状では建設計画が不透明なので、延長願いに「不許可の処分をとる」と返答しましたが、その後、中電が絶えず延長を求め続けてきた結果、「拒否」を「決断の保留」に変えていきました。中電に対して補足説明を求めながら、国のエネルギー政策の明示（変更）を待つ「引き延ばし策」を講じてきたのです。

民主党政権時代には、政府は原発の新增設に難色を示し、上関町の反対町民はほっとしていましたが、2012 年 12 月の政権交代で山口県出身の安倍晋三首相が復活しました。着任直後、新首相は運転停止中の原発の再稼働のみならず、新增設への意欲も明言しました²⁰⁾。

これらの結果、山本知事は、2014 年の 4 月半ばまで埋め立て許可延長の可否

19) IUCN 日本委員会 HP、<http://www.iucn.jp/2012/420-iucnngo.html>

20) TV 番組で安倍総理は「新たにつくっていく原発は 40 年前の古いもの、事故を起こした東京電力福島第 1 原発とは全然違う。何が違うのかについて国民的な理解を得ながら、新規につくっていくことになる」と言い放ったのです。『日本経済新聞』2012 年 12 月 31 日。

を先送りしました。それに対して、上関原発の延命措置を断ち切るために、2013年12月、上関の建設反対町民と県内支援ネットワークは、知事を相手取って「埋め立て免許申請の判断先送り」損害賠償訴訟を起こしました。祝島の漁師、橋本久男さんは、「上関で原発建設を許せば、他の地域での新設にもつながるでしょう」と、その危機感を表しています²¹⁾。

なお、2014年1月に突如山本県知事が辞任し、2月後半に県知事選がありますが、その直前の2月16日に上関町議選が行なわれました。町議選には反対の立場から4人が立候補し、祝島の山戸貞夫さんと清水敏保さんが当選しました。仮に新知事が埋め立て免許を延ばしたとしても、反対住民が引き下がることはないでしょう。

祝島漁協の苦悩

このシンポジウムの直後、祝島漁協は漁業補償金問題をめぐって分断させられました。2000年に祝島漁協は、上関などの7漁協と別れ、電力会社からの補償金の支給の受け入れを拒否しました。補償金は原発建設の法的条件の一つであり、支給しないと原発が建てられないのです。その後、祝島漁協は2006年に山口県漁協と合併し、「祝島支店」になりました。それ以来県漁協本店は、絶え間なく祝島の漁師さんの固い決心を切り崩そうとしてきました。

今回の政権交代の前後に、この圧力がいっそう強くなっていきました。そして、2013年2月、県漁協本店が相談もなしに「祝島支店」の総会の部会の開催を命じ、約11億円の受け取りを強引に勧めたのに対して、31人の組合員が不慣れな無記名投票で賛成を表し、21人の反対の声を上回ったのです。こうした県漁協本店の一方的なやり方に、祝島漁協は3月に53人の正組合員のうち39人のメンバーが書面で受けとり拒否を公約するという方法で、抗議の意思を表明しました²²⁾。

現在も、県漁協本店と祝島支店との対立が続いています。漁師同士の間にも、一部の漁師と一般島民の間にも、食い違いが生じています。自然農法で放牧豚を飼っている氏本長一さんは、「補償金に賛成した人たちは『子どもや孫に少しでも金を残せば』と思っているかもしれないが、一度でも原発の金を受け入れれば、ずっとそれを続ける」と、危惧しています²³⁾。

一方で、漁師さんの生活は苦しくなっています。祝島の漁師さんは周囲の漁師と異なり、一本釣りで生計を立てていますが、近年魚の価格が低迷するなか、漁協は赤字経営に追い込まれています。祝島支店を辞めている人も増えているそう

21) 植田千秋「政権交代～小さな島分断」『東京新聞』2014年1月12日。

22) 祝島島民の会 Blog、2013年3月1日、3月22日 (<http://blog.shimabito.net/>)、および山秋真「漁協補償金で揺れる祝島」『ふえみん婦人民主新聞』2013年12月5日号、p. 2。

23) 植田、前掲。

です。こうした状況の下で、原発建設計画が止まっている状態だということで、「もう原発計画は進むことはない」²⁴⁾と油断し、原発交付金を受け入れたい漁師さんが出てきているわけです。とはいえ、「実際に祝島の反対運動が変節したわけでは決してないのです」と島のお医者さん林徹さんは指摘します。

祝島の実態 — 進む過疎高齢化

「3.11以降、祝島が反原発運動の象徴のように美化されてきました」と林さんは言います。17年間、離島医療を続けてきた林さんは、7年前に祝島診療所の所長となりました。3.11以降の祝島の状況を次のように説明しています。

有名無名さまざまな人たちが来島し、祝島を美化することによって政治的に利用しようとしたり、自己宣伝に使ったりして

います。[中略]最近「身の丈にあった」という言葉がよく使われるようになっていきます。[この言葉を]使うことによって、必要最小限の医療や介護施設さえも否定しかねない言動を行なう人がみられます。これは、祝島を自己宣伝につとめている人の言葉です。[島民の]大多数の人たち（推進反対を問わず）は医療・介護の重要性を強く認識しています。[中略]祝島を美化するのではなく、祝島の実態を少しでも理解していただきたいと思います²⁵⁾。

祝島では、島民の9割が建設反対ですが、島の絶対人数は減る一方です。1976年の祝島の人口は1,200人でしたが、2000年に700人に、2013年には466人までに激減してきました。若者が出て行き、居残った者が高齢化していったのです。今現在、島民の7割以上は65歳を越えた高齢者で、平均年齢は80歳になっています。自家用の農業や漁をしながら、基本的に年金で暮らしている人が多いのです。

林さんが言うには、祝島は二重差別に悩まされています。まずは、行政レベルでの離島としての差別です。もう一つは、国策に逆らい、原発に反対し交付金を拒むことへの仕返し、つまり政治的差別です。

上関町の他の地区において、国や県や電力会社は合計およそ69億円の原発助



1982年から続く祝島の月曜デモ行進。
女性たちが主力をなしています。
(2012年9月3日)



祝島に掲げられている「原発絶対反対」

24) 祝島島民の会 Blog、2013年3月1日。

25) 私信、2013年5月10日。

成金を支給し、道路整備、学校の室内プール、温泉リゾート、郷土史学習館、原発PR館、公民館等々の他に、ある程度の福祉サービスをも整えてきました²⁶⁾。交付金に背を向けてきた祝島には公的事業が少なく、特別養護老人ホームも、グループホームも、ショートステイ施設もないし、高齢者の在宅介護はむずかしく、病院もありません。島の唯一の診療所の設備が古く、新しいレントゲンを獲得するには上関町役場との6年間の苦闘が必要だったそうです。老人ホームに入ったり、入院したりすることになると、定期連絡船で本土に移転するしかありません²⁷⁾。

「辺境」の力²⁸⁾

上関町の反対住民は30年以上も、少数派であり、さまざまな内部矛盾を抱えながら、優位に立つ県内、町内の推進勢力という巨大な権力に挑戦してきました。今も、告訴、デモや集会、ロビイング、選挙活動、環境保護に基づいた地域づくりを通じて原発誘致を拒否し続けています。その抵抗力の秘訣はどこにあるのでしょうか。

山戸貞夫さんは、祝島について、こう書いています。

肩を寄せ合いながら生きてきた島の人びとは、[中略]生活に根差した共同作業として、地域の中でお互いを尊重し合うという流れとなり、祝島島民自身が中核となって運動の取り組みを続けられた要因だと言える²⁹⁾。

「ジンギ」という島の言葉があります。友だちと親戚と分かち合い、「突出をゆるさない平等連帯」という意味だそうです³⁰⁾。そういう精神は島民の闘いを支えてきた要素の一つです。これは理念と政治組織の力に頼る都会の市民運動とは根本的に異なるところだと、山戸さんは言います³¹⁾。

26) 69億円は元町議員の小柳昭さん（原発に反対する上関町民の会）による計算です（インタビュー、上関の自然を守る会の室津事務所、2012年2月22日）。上関町の福祉施設について、ちゅうごく産業別創造センター『山口県上関地域振興計画調査報告書』2007年を参照。

27) 林徹「祝島におけるへき地診療所の現状」2013年3月30日、私信、前掲。

28) 「『辺境』の力」という言い方は、鎌田遵の『ぼくはアメリカを学んだ』（岩波ジュニア新書、2007年）になぞらえたものです。正確には「『辺境』に生きる多くのアメリカ人（のマイノリティ）が放つ光」と「可能性」（p. 209）。

29) 山戸、前掲、p. 156-157。

30) 山秋真『原発をつくらせない人びと』、岩波新書、2013年、p. 56。

31) 一方、室津や長島の反対運動は島民の会と対象的です。反対派は1〜2割で孤立しており、長年、推進側によるさまざまな嫌がらせを耐えてきました。「子どもが小学校の頃、私が原発に反対だと知られると、子どもが学校でいじめられた。[中略]『反対した親の子どもは学校には行けないし、結婚もできない』と集落のボスの人物に言われた」こともあると、原発に反対する上関町民の会のメンバーが率直に話してくれました。それでも、町民の会は島民の会や上関の自然を守る会と親密な関係を保ち、反対運動を精力的に展開しています。インタビュー、上関中央公民館（室津）、2012年9月3日。

高齢者の数から言えば、祝島はいわゆる限界集落に近づいていると思われます。つまり、独居老人がたくさん増えれば、共同生活を支える基本サービスの維持が難しくなり、集落崩壊も避けられない状態となります³²⁾。

しかし、この10数年間で、約40人が外からUターンし、生まれ故郷の祝島へ戻ってきました。3.11以降、さらに10数名の若者も、親族関係を持たずにIターンし、島に移住してきたのです。定住型到来者は、過疎高齢化の歯止め役として歓迎される反面、なかにはジンギの精神を尊重せず、自らの利益や地位を追求する者もあり、旧島民と軋轢を起こしている現実があります。ですが山戸さんは、元気な新島民が高齢者の本土への緊急搬送など、島の役に立つことをしてくれている者もいることから、「新旧島民が一つになるための、評価されるべき兆し」として好意的にとらえています³³⁾。

確かに3.11以降、祝島は大きな転換期を迎えているように思えます。そのなかで、まずは島の旧ボス制に戻らず、1992年以降つくられてきた運動の自主性、民主的運営を保つことが重要でしょう。しかし、過疎高齢化が進むなかで、島の従来のあり方と外から来る新しい影響と可能性とどう折り合いをつければよいかは、また大きな課題となっています。このあたり、山戸孝さんの報告のなかには、大事な手がかりがあるような気がします。

外から目新しいものを持ち込むのではなく、まず、自分の身の回りにあるものを自分が活かし切っているかどうかをよく考えます。[中略] 新しいから受け入れるのではなく、新しいものも古いものも、それが私たちの生き方に合うかどうかを見極めた上で取捨選択するのが、祝島的なあり方なのです。

3——「島外の視点」——若者の目から

最後に、2012年夏のフィールドワークに参加した学生は上関で何を見て、何を聞いて、何を感じたのか、そしてそれをどのように整理したのでしょうか。

三つの発見

参加者の大半は1年生でした。彼らは山戸さんと高島さんの紹介で豊かな感受性を発揮して多くの発見をしました。

しかし、帰る前日の午後に訪ねた推進側の「上関町まちづくり連絡協議会」(町連協)の話で動揺した学生がいました。町連協の若い代表者が、上関町の苦悩と原発の必要性について、反対住民に負けないほどの自信と熱意で語ってくれたので、

32) 山下祐介『限界集落の真実——過疎の村は消えるか?』筑摩書房、2012年、pp.23-26。

33) 山戸、前掲、p.159。

それまで反対側住民の話だけを聞いていた学生たちは驚き、町連協の立場に対しての感動とシンパシーを抑えることができませんでした。

その日の夕方の反省会では、高島さんがそのためらいを感じて、次のように応えました。

コメントを聞いて、皆さんがすばらしいと思ったのは、ここまで来て、見て聞いてきたさまざまなことを自分の生活、人生につなぎ合わせようとしているところです。[中略] 私が若い時に思ったのは、学生だけじゃなくて、いつか社会人になってどんな仕事をやるようになって、何かと貫ける分があるはずだということでした。皆さんも、自分なりに納得できるまで、さまざまな意見を聞いて、疑問を持ちながら考えていかなければならないと思います³⁴⁾。



祝島市場で、山戸孝さんのお話を聞きながら、干しダコの加工作業を手伝っている和光大学の学生。



学生たちが乗せていただいた、長島の自然を守る会の調査船「きぼう」。

学生がつくった報告書³⁵⁾を読み返して深く印象に残ったのは、次の三つのことです。

一つはかつて仲が良かった町民同士の内部分裂でした。山戸さんは、「原発反対運動というのは、賛成か反対かという二項対立の構造を生み出して、30年という長い年月が積み重ねたその溝が深くなってきたんです」と言い、町連協の方も「二項対立という状態は決して望ましいものではなく、大変残念です。いつかは解決ができると信じている」と話してくれました。

ただし実際、その溝を埋められる名案は見当たりません。その状況のなかで、学生は推進、反対双方の立場をフェアに理解しようとしてしました。必死になって自分なりにそれぞれの身になろうとして考え込んだ彼らの当惑が、ひしひしと伝わってきました。「先生、事前学習でそんなことを教えてくれなかったじゃないか」という控えめな批判もありました。その反応のなかには、鎌仲さんの言葉を借りていえば、「原発を推進する人たちに対して、金で魂を売ったと罵ってきました。そういう立場で反対運動をするというのは、日本の一つの伝統的な、ちょっと古いタイプの運動で、自分たちに正義がある」というイメージへの反発もあったと

34) 長島の自然を守る会の室津事務所にて、2012年9月5日。

35) 和光大学現代人間学部・現代社会学科『フィールドワーク報告書——上関・浜岡2012』2013年3月(137頁)。

思います。

二つ目は、大都会から上関町まで学びに来た私たちが抱えている自己矛盾、エネルギーを大量に消費する電化生活を当然のものとしている都会人の偽善行為への目覚めです。環境の破壊、地域生活の変質、人間関係の崩壊など、「遠隔」の地に押しつけられている原発立地の負の部分の初めて見、肌で感じました。

「迷惑料」だったはずの原発マネーが地域の独自性を損ない、格差を生み出し、「地方」への差別³⁶⁾につながると、一人の学生が書きました。そこには自らの責任も目立つ、ほんの一部ですが、社会システムとしての原発の重苦しさを垣間みたのでしょうか。

この二つの発見は座学では得られないものですが、その目覚めには悩みも伴いました。もう一人の学生が次のように振り返っています。

地方の町へ行って、それまでに見えなかった暗い部分を見てしまった。その見えなかった部分を自分の中で取り込んで考えていくのは、フィールドワークの目的ではないですか。そういうのを家に持ち帰って、絶えず考えてしまいました。表面的ではなくて、見えないものが自然に身についたという感じです。だから、そこがすごく自分の中で大きく変わったことのひとつだと思います。[中略] 暗いなかには生きているのかなという自覚があります³⁷⁾。

三つ目の発見は、生命にあふれた上関の生態系、その何とも言えない美しさです。「南国リゾート地のようなきれいな海と塩っぱい海水で海の豊かさを感じたり、稀少生物を生で見て本当にいたのかと驚いたりもした。大自然は無条件に愛せるものなのだと実感し、上関町を改めて訪れたい、自分の大切な人に見せてあげたい、と思った。」とある1年生が書きました。学生のもう一人は短い映像作品も制作し、推進、反対を問わず、上関の独特な自然美を生き生きと映し出していました³⁸⁾。

私たちは何を学んだのか

フィールドワークが終わってから2ヵ月後、学生がチームを組んである研究会の年次全国大会で上関原発問題について発表しました³⁹⁾。

またその1年後、川崎市平和館の主催する二つの企画展に参加し、4つのパネ

36) 同上。

37) 同上。

38) 「上関・祝島」(波多江信義)はYouTubeで観られます。<http://www.youtube.com/watch?v=BdwUVgjh-E> 参照。

39) 大学教育における「現場体験学習」研究会による「現場体験学習がもたらす『変容』とは何か—Transformative Learningの可能性」、国際基督教大学にて、2012年11月10日。

ルで上関・祝島を取り上げ、関連するシンポジウムで2回のプレゼンテーションをしました⁴⁰⁾。学生たちにとって2012年に終わったはずの体験は、学びのプロセスとして今もおngoingしています。

長いスパンを経て、学生のなかにいろいろな変化が生じたと思いました。原発と地域社会の関係でいえば、まず、推進、反対双方の主張を対等に考えて尊重しようとする姿勢は大事です。しかし、その二つの立場は決して同質のものではありません。その関係の根底には、鎌仲さんが言う「莫大な予算と権力」の格差が潜んでいるからです。

もう一つは、山戸孝さんの報告からわかるように、もしも国策として上関原発がつくられたとしても、10数年間の歳月がかかるでしょう。町民はひたすら力を合わせて、原発の先にあるものを探らなければならないのです。

さらに、反対派もそうですが、推進側は決して一枚岩ではないし、新しいつながりも不可能ではないと高島さんが証言しています。原発経済からの脱却は小さなところから始まる。地味そうに見えても、地域の真のニーズの視点に立って、共通の利益を対等に着実に追求し、飾らずに周囲の人びとを説得していけば、それで「何か少しずつお互いに気持ちが変わっていくように感じています。」と、高島さんが教えてくれます。

このようにして「辺境」の力とは、コミュニティの生命力であり、日常生活に根ざした、持続可能な未来の実現への努力と願望とビジョンであると考えます。なおこれもまた、特定の地域を超え、より広い連帯感と協力体制を呼び起こさせるものでもあります。

最後に、山戸さんがいう「島外の視点」として、学生たちが川崎市平和館でパネル展示した言葉を借りながら、私の報告は終わります。

[原発] 交付金は上関町に豊かさや平穏な生活をもたらして来たのでしょうか。お金を受け入れることは、地域の独自性や人間関係、自らの生き方を決定する権利の放棄を意味するのではないかと考える町民は少なくないように思えました。

[中略]

[祝島では] 太陽光発電、生産者と消費者をつなぐ水産・農産物の直接販売、放牧豚などに積極的に取り組む姿勢はとっても印象的でした。「都会部の皆さんには原発はエネルギー問題に過ぎないのかもしれないが、私たちには生活に直結する問題だ」と切実に訴えた山戸孝さんの言葉は、今でも忘れ

40) 川崎市平和館企画展①「環境から考える平和」(2013年11月15日～12月18日)、②「おカネから考える平和」(2013年12月21日～2014年1月31日)。シンポジウム1:「ユース・草の根の考える環境問題」(2013年12月24日)、シンポジウム2:「ユースと考えるおカネと平和」(2014年1月12日)。

られません。

[中略]

原発を建てる時の衝撃をやわらげる役割を果たすはずだった交付金ですが、こまかく見ていくと、逆に立地周辺でさまざまな問題を引き起こし、地域の平和を壊すことにもなると私たちは気づきました。どうしてこのような事態になるのでしょうか。

そもそもの問題は、上関町の人びとにとっての本当の幸せを考えず、「お金を渡せば何でも解決できる」と一方的に助成金を押しつけたことだと思われます。お金だけで、地域住民が幸福に募らせるとは限りません。総額 69 億円もの助成金を提示されても、いまだに反対を続ける住民の存在は証明していると思います。

一方では、上関は交付金などの「富」＝お金によって、財政的に潤う面は確かにあるでしょう。しかし他方、お金よりも大切な富を地域に見いだしている住民がいることも事実です。お金と引き換えにできない富を、上関町に見いだしている人びとがいるからこそ、30 年もの間、上関原発が建つことがなかったのかもしれませんが。

[Robert Ricketts]